

数で多くの品は扱って来る事は不可能に見える。女神山中腹に仮屋を建てて住む事になったのも、旅を続けられない事情の爲であつたと推測して居るが、他に病気とか種々の原因だつたとすれば再びこの地方から移動される筈だし再出発に關しての話は全然伝わっていない。以上の事から見て小手姫が皇后であつた事は間違いない事実である。だが女神山麓の各部落にも、広く語り継がれた伝説にも全然この事実は語られていない。それは父の大神糠手のように名は替えなかつたけれども、その身分については極秘とされたからであらう。更に機織り神及び養蚕神社縁起等の附会の説が紛れこんで益々昏迷したのであらう。

例えば川俣の機織神社縁起に(又は小手濫觴記)

一、人皇十六代仁徳天皇の御代大和国高市郡川跨の里に庄司秦の峰能という人あり、この人、天皇の命を蒙り一子小手姫を伴えてこの地に来り桑を植へ蚕を飼ひ絹を織る業を教えたり、朽人山より西北の諸村を総稱して小手郷というは小手姫より出でたるものにして」と記している様な訳で、更にこの小手姫を四十八代称徳天皇の時代としたものもある。この称徳天皇の侍医で百濟から来た小手子という女医があり称徳天皇亡後、都に居る事が出来なくなつて、この小手郷の『飯坂村尼館に住す頗る名医(靈人ともいつている)にして国中の人々より学信せらる』とあり、この小手尼が小手姫が尼になったのだという附会が流れて居たところもあつたが、これは昭和四十三年の歴史読本に小手尼の事が詳しく述べられているが、小手姫と小手尼の年代には明らかに百二十六、七年の隔たりがあるのに一ツのものに混同された記録が何時の時に書き遺されたのである。記録する事の大事な心構えといふものが痛感させられるのである。

川俣町大字秋山一メ森、佐藤長明氏所有の小手姫記事及小手姫古事による。